

旅 順 と 乃 木 希 典

平成14年2月2日・高根台公民館

きょうお話する旅順は、日露戦争で日本が一番苦戦をした戦場です。延べ十三万の将兵が、攻め落とすのに半年もかかり、半分近い五万九千三百人の死傷者を出しました。日露戦争の陸軍の戦死者は全部で六万人ですが、そのうち四分の一の一万五千人がこの旅順で死んでいるのです。第三軍司令官として旅順攻略の指揮をとったのが、長州出身の陸軍大将乃木希典です。日本の陸軍には、西郷隆盛以来百三十四人の陸軍大将が生まれていますが、中でも乃木は、戦後も長く国民の記憶に残る大将の一人でした。苦戦はしたが旅順を攻略した名将であり、乃木自身この戦争で二人の子供を戦死させた悲運の將軍でもあります。しかも衝撃的だったのは、明治天皇が亡くなると、夫人と共に殉死して天皇の跡を追ったことでした。乃木は理由として、遺書に明治十年の西南戦争で軍旗を奪われたことを挙げています。殉死まで三十五年間も自分を責め続けていた。その責任感の強さと天皇に対する忠誠心が、人々の胸を打ちました。さらには誠実、質素で、慈愛深い。こういった古武士的なイメージが重なり、乃木は浪花節から講談、映画やお芝居にも取り上げられ、軍人のお手本として美化されていったのです。

しかし、敗戦で軍隊がなくなってもなお、乃木の人気が高かった秘密は、何といても佐々木信綱作詞の唱歌、「水師營の会見」にあったのではないのでしょうか。「昨日の敵は今日の友」——国民に広く愛唱されたこの歌は、日本武士道の奥床しさを伝えるものであり、日本人の誇りでもありました。乃木は降伏したステッセル將軍と水師營で会見した時、ステッセルを名譽ある武將として扱いました。降伏の印である劔を取り上げずに、サーベルの着用を許したのです。それはまた、太平洋戦争でシンガポールを攻略した山下奉文大將の、居丈高な態度とも比較されました。山下はパーシバル將軍に降伏を迫って、「イエスカノーか」と、机をドンと叩いたと云うのです。もし山下が乃木にならっていたら、あれほどイギリスの憎しみを買うこともなく、あるいは戦犯裁判で死刑にならなかつたかも知れません。

もっとも山下の名譽のために云うと、ちっともそんな積もりじゃなかつたのだそうです。これは作家の今日出海さんが、山下から直接聞いた話として書いているのですが、パーシバルが愚図愚図している。そこで「どうなんだ」と通訳に聞いたら、通訳がいきなり「イエスカノーか」とやってしまった。つまり通訳の言葉が山下の言葉になってしまったのですが、あのギョロリとした大きな目、堂々たる

体格が威圧的な感じを与えて、損をしたのかも知れません。それはともかくとして、乃木はアメリカの映画技師が会見場面を撮影したいと云ってきても、「敵将を侮辱するものだ」と云って許しませんでした。そして従軍記者たちのたつての願いで承知したのが、会見の後で友人として並んだ記念写真。それも一枚だけという条件でした。お手元の資料の写真がそうですが、このエピソードは外国人記者によって大きく報道され、乃木の名前は世界に広まったのです。

そんな乃木人氣に波紋を投げかけたのが、司馬遼太郎さんが昭和四十二年に発表した「殉死」という作品です。司馬さんが「歴史というものは、百年経たないと生乾きの状態で、乃木さんのことをとやかくいうと何かと問題になる」。こうグチるほど、賛否、ごもごも大変な反響でした。「殉死」には、乃木の軍事能力について「ほとんど無能に近かった」といった表現が再三出てきます。乃木を名将だと思っていた人たちは、びっくりしました。読売新聞の文化欄に「乃木將軍は無能ではない」と反論したのが、今村均陸軍大将です。今村は太平洋戦争でインドネシアのジャワ島を占領すると、シンガポールのような弾圧政策を取らず、中央から「日本軍の威信に関わる。もつと厳しくしろ」。こんなクレームがついたほど、大變穏やかな軍政を敷いた人です。そして戦後の戦犯裁判で禁固刑を受けると、自ら志願して部下のいるマヌス島で服役したと云う、実にさわやかな生き方を貫いた軍人でした。その今村は「旅順の苦戦は参謀本部に原因がある」と云うのです。「一挙に攻めろ」という参謀本部の要求に沿って、第三軍の参謀長が作戦計画を立てている以上、軍司令官の乃木としては容易に訂正しにくかったろう。むしろあれだけの犠牲を出しながら、最後まで将兵の気持ちをついにまとめ、戦い通せたのは、乃木の人徳である」と云っています。いわば多くの「乃木ファン」の気持ちを代弁したものでした。

それでは日本の陸軍は、この旅順の戦いをどう分析し、どう記録として残しているのでしょうか。参謀本部が編纂したものに、「明治卅七八年日露戦史」があります。完成が大正三年と、足かけ八年もかかった前後十巻の大変膨大なものですが、司馬さんに云わせると、「これほど不思議な歴史書は、ちよつと見当たらない」。実に克明に詳細に書いてあるのに、まるで煙でも掴むみたいに、戦争の実体がよくわからないと云うのです。と云いますのも、この編纂作業と並行して論功行賞、將軍たちがどう働いたかを査定し、勲章や爵位を授ける作業が進められていたのです。將軍のほとんどは軍の高級幹部として現役ですから、戦史に少しでもよく書いてもらおうと、いろいろ圧力がかかっています。

乃木は日清戦争で男爵になり、日露戦争では子爵を通り越して伯爵です。第三軍参謀長の薩摩出身伊地知幸介少将は、戦争が終わった時中将になっていましたから、中将以上という爵位の規定に従って男爵になりました。当時の陸軍部内で「伊地知の無能無策で無用に兵を殺した」と云うのは定評だったと云われますが、

だからといって「伊地知の男爵はダメだ」とすれば、乃木にも傷がついて伯爵に出来ません。論功行賞で手柄があるとしたのに、陸軍の公の戦史にそれを否定するようなことは書けません。勢い当たらずさわらず、八方美人的な書き方になり、失敗のない戦史が出来上がってしまったのです。

実は司馬さんの「殉死」と相前後して、「機密日露戦史」という本が出版されています。これは支那事変の南京虐殺事件での責任を問われて現地裁判で死刑になった谷寿夫中将が大正十四年、陸軍大学の教官時代に学生に講義したガリ版刷り十二冊の講義録をまとめたものです。未公開の軍事秘密資料をふんだんに使い、関係者の生々しい証言を集めた貴重な戦史で、旅順についても失敗の真相を明らかにしています。「極秘」の扱いで、陸軍でもごく限られた人しか内容を知りませんでした。こうした資料が早くから公開されていたら、「戦えば必ず勝つ」といった軍隊神話、「神の国だから絶対負けぬ」といった馬鹿げた思い上がりは、生まれなかつたように思います。

明治という時代は、薩摩と長州の薩長全盛の時代でした。何事もこの二大派閥がスクラムを組んで進めましたが、同時に一步裏に回れば事毎に張り合う仲間もありました。ですから例えば内閣の閣僚人事にしても、長州から何人出たから薩摩は何人と、そのバランスの上に成り立つことが多かったのです。お手元の資料の日露戦争の軍司令官を見て下さい。満州軍總司令官の大山巖をはじめ、第一軍の黒木為楨、第四軍の野津道貫が薩摩であり、第二軍の奥保鞏は九州の小倉出身です。第四軍は満州平野での決戦兵団として、早くから勇将野津の起用が決まっていたから、第三軍が編成されるまでは「長州の陸軍」と云われながら、出征軍の軍司令官に長州がいません。長州閥の総帥で陸軍の大御所山県有朋が、「第三軍司令官は是非とも長州から」と思ったのも無理はありません。軍司令官にしておかしくない古参の將軍というとなつておかしきありません。軍司令官が長州なら参謀長は薩摩からと、大山巖の姪を奥さんに行っている伊地知幸介となつたようです。要塞旅順を攻めるのに、能力、経験からいつて誰が適任かではなく、薩長のバランス感覚が優先した人事でした。

それに旅順攻略は、もともと陸軍の計画にはなかつたのです。あんな先づきはほつといて、満州平野で主力決戦を挑む。これが開戦当時、参謀本部次長として陸軍の作戦計画を立てた児玉源太郎の考えでした。「旅順は竹矢来で囲っておけばいいんだ」。児玉はこんな、冗談とも本気ともつかないことを云っていたようです。海軍も旅順のロシア艦隊は、狭い港の出入口を塞いで出られないようにすればよいと思っていました。ところがボロ船を沈めて、港を塞ごうとした三回の閉塞作戦がごとく失敗し、要塞に守られたロシア艦隊は港の奥深く閉じこもつたまま出てきません。そこへバルチック艦隊の極東派遣が決まり、海軍としてはバルチック艦隊がやって来る前に旅順艦隊を撃破しておかなければならぬ

りました。そこで「陸上から攻めて旅順艦隊を追い出してほしい」と、いわば海軍の要請で第三軍の編成となったのです。

乃木は日清戦争の時、旅団長として旅順を一日で落としています。「乃木は旅順を知っている」。これも、軍司令官に乃木を起用した理由の一つではありません。ところが旅順は、乃木の知っている十年前の旅順ではなかったのです。二十万樽のセメントを使って、砲台や陣地をコンクリートで固めた永久要塞でした。乃木は勿論、参謀本部も知りません。参謀本部も開戦直前、参謀将校を中国人労務者に変装させて旅順に潜入させたのですが、ロシア軍の警戒は厳重でした。旅順に入る列車は全て窓のブラインドを降ろさせ、どんな地形になっているのか、それさえもぞかせようとしません。一説には情報洩れを恐れたロシア軍が、築城工事の中国人労務者を酒に酔わせて皆殺しにしてしまった。こんな話さえあります。

戦地へ向かう乃木が乗船地の広島で大本営から受け取ったのは、日清戦争当時の二万分の一の古い地図。そこに、それまで集めた情報に基づいてロシア軍の配置状況が記入してあるのですが、陣地も「臨時築城」程度のもとなっていました。守備隊もせいぜい一万五千と踏んでいたのに、実際は四万八千のロシア軍が五百十四門の大砲、五十七丁の機関銃に守られ、八か月分の食糧を貯えて待ち構えていたのです。

もつとも、開戦直後に真つ先に旅順攻略にかかっていたら、あるいは旅順はもつと簡単に落ちていたかも知れません。実はこんなに永久要塞として強化されたのは、戦争が始まってからなのです。築城工事は明治三十三年から始まっていたが、商業港としての大連港整備を急いだため、旅順築城に投入されたのは大連港の工事費の一八%足らずだったそうです。戦争が始まって陸上防衛隊長になったコンドラチェンコ少将を愕然とさせたのが、大砲のほとんどが海からの攻撃に備えて、海上正面を向いてしまっていることです。陸上に向けた大砲は二百門しかなく、兵力も二万四千人です。要塞築城の専門家であるコンドラチェンコが先頭に立って指揮をとり、毎日一万人前後の労務者を動員して強化工事を急ぐと共に、兵力、火力を倍増させたのです。

まず堡壘と云ってトーチカのコンクリートは、口径十五呎の大砲の砲弾が当たっても大丈夫なように、厚くされました。その周りには深さ七呎から九呎、幅が六呎から十二呎もある濠がめぐらされ、そこへ飛び込んだ日本兵は、それこそトーチカのどこからでも射撃出来るように銃眼が備え付けられていました。トーチカとトーチカの間には、鉄条網を張った歩兵の塹壕が掘られ、日本兵が誰云うとなく「化物屋敷」と噂するほど、まさに蟻地獄のようなものになっていたのです。

こうして要塞旅順の正体を全く知らないまま、第一回総攻撃が始まったのが明治三十七年八月十九日です。陸軍は二、三日で落とす積もりでした。陸軍省

の庭には陥落発表に備えて新聞記者用のテントが張られ、新聞社もいつでも配れるように、日付なしの「旅順陥落」の号外を印刷して待っていたほどです。東京、横浜では旅順陥落祝賀会を開く予定で、入場券が飛ぶように売れたと云います。第三軍も参謀本部も、それほど簡単に旅順を考えていたのです。情報不足と自信過剰が、第一のつまづきでした。

地図をご覧になって下さい。真ん中の上の方に、乃木とステッセルが会見した水師営があります。旅順というのは、八世紀から十世紀にかけて渤海と云って満州から沿海州に勢力を張った国ありましたが、海外に使者を送る際必ずここを通ったので、旅の順路ということの名付けられた、古い地名なのだそうです。水師営は清の水師提督、日本で云う海軍の提督がいて、ここに水兵の兵営があつたからです。第三軍の作戦計画は、その水師営の南、二竜山から東鷄冠山にかけての要塞正面を強行突破しようというものでした。参謀本部は旅順を一日も早く落として、第三軍を満州平野の決戦に持つて行く考えでしたから、それにはこれが旅順市内への最短距離であり、大砲の配置も簡単だし、素早く威力を発揮出来ると思ったのです。二〇三高地、地図では左の方にあります。日露戦争と云えば旅順、旅順と云えば二〇三高地。実際はこの標高二〇三の全く無名の山が旅順の死命を制することになるのですが、第三軍はここからの攻撃は考えていませんでした。二〇三高地から攻めるには、前進基地が必要だし、大砲を展開するのにも時間がかかる。これが理由でした。要塞正面からの攻撃は、「少々犠牲が出てもこの方が早い」。第三軍は自信満々だったのです。

旅順の戦いは、「人間とコンクリートの戦い」だったと云われます。二百八十門の大砲が二日間で十二万発と云う膨大な砲弾を撃ち込み、「もうよかろう」と三個師団五万七百の将兵が一斉に突撃しました。ところが土煙が上がり、コンクリートの表面が月面のようになつても、コンクリート陣地はびくともしなかつたのです。ロシア軍の陣地は、旅順の市街地をグルリと囲んだ小高い丘の上に築かれています。緩やかな斜面には、体を隠す岩も木もありません。上から丸見えのところを突撃したのですから、たちまち機関銃や大砲の十字砲火を浴び、一万五千八百人の死傷者を出して失敗に終わりました。死傷率三一%。軍隊では三〇%を超すと「戦闘不能」と見做すんだそうですから、第三軍は最初の攻撃で早くも戦闘能力を失ったことになりました。

双眼鏡を覗いていて、「あんなことじゃいかん。草に隠れているようで、戦さに勝てるか」。こう怒鳴った乃木が、しばらくして黙り込んだと云います。草の中に隠れているように見えたのは、機関銃に薙ぎ倒されて、動かなくなつた死体の山だったので。この攻撃で落とした敵陣地は、わずかに一つ。それもロシア軍の反撃が凄いので、慌てて周りの死体を土嚢代わりに積み上げ、その蔭にやつと体を隠したと云います。真夏ですから、翌日には死臭が漂い出し、三日目には

ウジ虫がうようよ出てきます。せめて臭いだけでも何とかしようと、あるつだけ
の線香を焚いたと云いますから、何とも鬼気迫る、凄惨そのものの戦場でした。

情報不足から一回目の失敗はわかるとして、なぜ要塞旅順の弱点を見付けて、
そこから攻める。戦術で云えば、ごく基本的な方法を取らなかつたのでしよう。
岡目八目というのか、見る者が見れば分かるというのか、二〇三高地が旅順の弱
点だと、いち早く見抜いた人がいます。やがて日本海海戦で活躍する、連合艦隊
作戦参謀の秋山眞之海軍中佐です。第三軍司令部には海軍の参謀が連絡要員とし
て派遣されましたが、秋山はその参謀宛てに実に二十八通もの手紙を書いて
いるのです。その中で悲鳴をあげるように訴えているのは「二〇三高地を取れ」、
「攻撃の主力を二〇三高地に向けてほしい」ということでした。

二〇三高地は、西の地区では一番高い山です。しかも露出陣地といつて、大砲
が剥き出しになつていて、コンクリートで固めた要塞ではありません。ここを取
るのは比較的簡単だし、この高地からは港が見下ろせるに違いない。大砲の観測
所を置けば、何も旅順を落とさなくても、旅順艦隊は砲撃で撃滅できる。秋山は
そう思つたのです。ところが第三軍参謀長の伊地知幸介少将は、「陸軍には陸軍
のやり方がある」と云つて、はねつけました。旅順を落として、初めて陸軍の手
柄になるのです。それなのに、そんな二〇三高地なんか寄り道してられるか
というわけです。

もう一人、二〇三高地に注目したのが、児玉源太郎の後に参謀次長になつた長
岡外史少将です。長岡は何とか第三軍を二〇三高地に向けようとしませんが、伊地
知参謀長は頑として聞きません。機密日露戦史には、伊地知のことを「老朽変則
の人物」。老いばれていて、キチンとした物事の理屈がわからないということだ
しょうか、「参謀長を即刻代えてほしい」と長岡に切々と訴えた、ある旅団長の手
紙を紹介しています。長岡自身も、第三軍に対する極めて強い不満を日記に書き
残しています。まず第一に、司令部の位置が前線から遠過ぎる。敵の砲弾の飛ん
でこない所に司令部を置いたのだろうか、あれでは前線の様子がわからないし、
臨機の措置も取れない。第二に、参謀が偵察しないで、一線の若い将校に任せつ
切りにしている。「驚くべき不始末の偵察」と書いています。参謀がこの未知の要
塞を自分の目で確かめようとしないので、有効な手立てが打てるはずもあ
りません。第一線も参謀本部も「こんな参謀長じゃダメだ」と思つていたのに、最
後まで伊地知を代えなかつたのは、問題は誰が猫の首に鈴をつけるのか。つまり
大山総司令官の親戚なので、参謀長更迭を積極的に言い出す者がいながつたので
す。

旅順を落としたのは、二十八号榴弾砲と云う巨大な大砲だつたと云われます。
よく日露戦争の記録映画に、ずんぐりむっくりした大きな大砲が出てきますが、
それがそうです。このヒントを長岡に与えたのは、有坂成章という大砲の技術開

発が専門の少将でした。有坂は云うのです。「厚さ一呎三十浬の旅順のコンクリートを割るには、最低でも二十二浬の口径の大砲が必要だ。それを持つていけば旅順は落ちる」。陸軍には、そんな大きな大砲はありません。ところが有坂は、東京湾観音崎砲台の二十八浬榴弾砲がそうだと云うのです。東京湾に侵入して来る敵艦を迎え撃つ海岸の要塞砲ですが、バルチック艦隊に備えて、対馬へ持つて行く話が出ていました。いつそそれを、旅順に持つて行ったらどうかと云うのです。

ところが伊地知参謀長の返事は、「送るに及ばず」。砲兵の専門家に聞いても、大砲据え付けのコンクリートが乾くのに、一か月も二か月もかかる。そんなものを送られても、役に立たないと云うのです。長岡は伊地知の融通のきかない、頑固な性格を知っていましたから、返事も待たずにさっさと先に送っていました。「要らない」と云う先入観に基づいた判断が、いかにいい加減なものか。その二十八浬砲六門が半月も経たないうちに据え付けを終わり、砲撃を開始したのが十月一日です。旅順市内は震え上がったと云います。さしもの頑強さを誇ったトーチカを破壊しただけではなく、何よりびっくりさせたのは、唸りを上げて飛んでくる轟音であり、凄まじいまでの爆発音でした。旅順は心理的にも参つていくのです。

第三軍も九月に、一度は二〇三高地を攻撃しています。ただ攻撃の重点はあくまでも要塞正面であり、二〇三高地に向けたのは、後備兵と云つて年令的にも攻撃力の劣る二個大隊だけでした。ロシア軍も四個中隊が守っているだけだったのですが、かえつてコンドラチエンコ少将に、この高地の戦略的価値を気づかせる結果になつてしまいました。コンドラチエンコは惜し気もなく増援部隊を投入して、「最後の一兵となるまで死守せよ」と命じたと云われます。そして日本軍を撃退すると、本格的築城にかかったのです。もし第三軍が総力を結集していたら、二〇三高地はこの時落ちていたでしょう。

十一月二十六日の第三回総攻撃では、三千人の決死隊が編成されました。夜間攻撃で同士討ちをしないよう、白い木綿の布を十文字に襷掛けにしたので、「白襷隊」と呼ばれましたが、指揮官の中村覚少将は「生きて帰ろうと思ふな。退却する者があれば、これを斬れ」と、悲壮な訓示をしたと云います。松樹山の砲台を奇襲して、一挙に旅順市内に斬り込もうと云うのですが、無茶としか言い様のない作戦でした。たちまちサーチライトに煌々と照らされ、つるべ撃ちにあつて死傷者二千三百人を出し退却しました。死傷率実に七六%。千扁一律、出血のみを求める、無意味な肉弾突撃の繰り返しでした。

万策尽きた乃木軍司令官は二十七日朝、ついに要塞正面の攻撃を中止し、二〇三高地攻略を命令したのです。何か言いかけた伊地知参謀長を押さえ、乃木の口から出た初めての命令だったと云います。海軍も長岡参謀次長も待ちに待った、

そして余りにも多大な犠牲を払つての作戦転換でした。

そのころ満州軍総参謀長の児玉源太郎大将は、大山巖総司令官署名の一札を懐に、旅順に向かつていました。それは「満州軍総司令官の名を以て、第三軍に命令することを貴官に任す」。つまり、児玉は総司令官代理として行くわけで、乃木が云うことを聞かなければ、軍司令官の指揮権を奪つてもよいというお墨付きです。その命令書を一刀両断の形で突き付けたのか、あるいは情理を尽くしての説得で同意させたのか、それとも以心伝心、使わずにすんだのか。いろんな説があります。児玉・乃木会談は二人だけで行なわれ、戦後も二人とも口を噤んでいるので真相はわかりません。ただ児玉に同行した参謀の田中国重少佐は、「乃木將軍は涙を流して、致し方なし、任す、と同意せられたり」と言っています。この言葉からすると、情理を尽くしての説得で、命令書は使わなかつたように思えます。

児玉は、軍司令官代理として直ちに行動に移りました。二〇三高地は日本軍が占領したかと思うと、すぐ奪い返され、頂上から麓までの斜面は両軍兵士の死体で覆われていたと云います。児玉は、重砲陣地の大移動を命令したのです。高崎の第十五連隊が占領したので、「高崎山」と名付けた高地に重砲を集め、そこからの一斉砲撃で、斜面を狙い撃ちに行っている敵の砲台を制圧しようとするのです。第三軍の参謀から「重砲はそんなに簡単に移動出来ない」と反論が出ると、児玉は「命令」と怒鳴つて、有無を云わずに二十四時間以内の陣地転換を実行させました。こうして十二月六日朝、ついに二〇三高地は落ちたのです。この戦闘だけで死傷者一万七千。もともとは素直な双子山だった二〇三高地は、両軍の砲撃で凹凸だらけの醜い山に一変していました。そこには、両軍兵士の死体が何重にも折り重なり、一面赤い毛布を敷き詰めたようだったと云います。

「旅順港は見下ろせるか」。山頂を占領した部隊に、児玉が真っ先に聞いた有名な言葉です。二〇三高地からは、港内の軍艦が一望のもとでした。この写真は歴史の会の会員の方が旅順へ行かれた時、二〇三高地から撮られた写真ですが、これを見ても「一望のもと」と云うことが、よくわかります。十八門に増えていた二十八杼榴弾砲が港内の四隻の戦艦を沈め、外に逃れようとした一隻も東郷艦隊に撃沈されました。そして十五日、ロシア軍の陣頭に立つて奮戦していたコンドラチエンコ少将が戦死すると、ロシア軍の士気は急速に衰え、一月一日の降伏申し入れとなつたのです。伊地知参謀長は児玉に噛み付いたそうです。「弾丸もくれないで、ただ落とせ落とせというなら、わしでも出来る」。とても大勢の人命を預かつて、作戦を立てる参謀長の言葉とは思えません。しかし旅順の多大な出血は、伊地知の頑迷なまでの無能無策にあつたとしても、やはりそれを黙認し、ギリギリまで動こうとしなかつた軍司令官の乃木にも、大きな責任があつたのではないでしようか。

戦争が終わって三十九年一月十四日、第三軍は東京に凱旋し乃木は明治天皇に拝謁して戦闘経過を報告しました。復命書の要点は資料に書いておきましたが、乃木が「旅順の攻城には半歳の長月日を要し、多大の犠牲を供し」、ここまで読み上げてくると、嗚咽で何度も声が途切れたと云います。乃木には「王師百万」の有名な漢詩があります。王師と云うのは天皇の軍隊のことですが、「王師百万驕虜を征す 野戦攻城屍山をなす」。乃木は「何のかんばせあつてか父老にまみえん」と、戦死させた部下の親たちに詫び、「凱歌上がる今日、何人が帰ることが出来たろうか」と、自らの戦いを恥じています。旅順で苦戦しているとき、乃木の家には「人殺しだ」と云って石が投げられ、乃木の元には二千四百通もの非難の手紙が殺到していました。他の將軍たちの復命が、型通りの勝利報告だったのに対し、乃木のそれは、自らに鞭打つような自己批判でした。乃木ファンが多いのは、そこに繊細とさえ思える、乃木の良心を見るからでしょう。

異例といえば乃木の復命書は、官報では二十五字も伏せ字で発表されました。三十八年三月の奉天の戦いで「攻撃力欠乏により」、つまり兵力、弾丸の不足で、敵の退路遮断という任務を全うできなかった、と書いているのです。兵力不足の真相が明らかになるのを嫌って、陸軍当局が伏せ字にしたと云われますが、生涯弁解することのなかった乃木の唯一の例外でした。そこには満足な兵隊、弾丸をくれなかつた参謀本部や満州軍に対する不満、それを言外に籠めていたのかも知れません。

ところで乃木といえば、誰もが「謹厳無比の乃木」を連想しますが、そうした古武士的な乃木は、実は明治二十一年、三十九歳でドイツ留学から帰国してからの乃木なのです。それまでの乃木は「放蕩無頼」という言葉がぴったりなほど、夜な夜な柳橋、両国、築地の料亭を飲み歩き、日記には相手をした芸者の名前を克明に書き付ける乃木でした。「乃木の豪遊」と云って有名だったそうです。昭和の初めに首相になって、「おらが宰相」といわれた長州の後輩田中義一陸軍大將は、こんなことを云っています。「乃木將軍は若いころは、陸軍切つてのハイカラであつた。紬の揃いに角帯を締め、ゾロリとした風で、あれでも軍人かといわれたものだ。それがドイツから帰ると恐ろしく奮力ラになって、内でも外でも軍服で押し通す変わり方だ。それが余りにひどいので、ワケを聞いたが『感ずるところあり』というだけで、どうしても云わなかつた」。ドイツで、一体何が乃木を変えたのか。またそれまでの酒びたりの生活は、一体何だったのか。

乃木は遺書にも書いているように、西南戦争で軍旗を奪われています。その自責の念が乃木を酒に走らせたというのは、どうも後からつけた話のように思えます。乃木の連隊は熊本城救援に向かう途中、熊本の北、田原坂で薩摩軍に包囲され、乃木はやつと脱出したのですが連隊旗手の河原林雄太少尉が戦死しました。河原林は戦闘が始まる前、軍旗を竿から外して、袋に入れて背負っていたのです。

が、それが薩摩軍に奪われたことを乃木が知ったのは、二か月ほど経ってからでした。熊本城を包囲していた薩摩軍が、丘の上に奪った軍旗を立てて囃し立てたためですが、乃木はすぐ進退伺いを出しています。ところが「軍旗を奪われたのは旗手が戦死して万やむを得ない」ということで、一切お咎めなし。乃木も少佐から中佐に進級しています。つまり当時は、問題になっていないのです。

軍旗は明治七年一月に近衛歩兵連隊が創設された時、明治天皇から各連隊に直接渡されるようになりましたが、その軍旗が団結のシンボルになり、いわば「天皇の分身」として神聖なものと考えられるようになるのは、もっと後のことなのです。乃木は確かにこの後、死に場所を求めようとしたのでしよう。左足と左腕に二回も負傷して入院しています。しかし放蕩無頼が九年間も続いたことを考えれば、それは軍旗問題ではなく、やはり若気の至りと見た方が自然でしょう。そして、酒に紛らさなければならぬほど乃木を苦しめたのは、もっと別なことだったように思います。

X

X

乃木は長州と云つても、下関五万石の支藩、長府藩の出身です。代々江戸詰め
の医者の家柄でしたが、養子に入った乃木の父希次が医者が嫌で武芸に熱中し、
武士として仕えるようになりました。乃木は三男ですが、兄二人が早死にしたの
で跡取りです。小さい時は体も弱く、学問で身を立てたいと思つていたようす
が、医者を捨ててまで武士になった父親が許しません。結局乃木は十五歳の時、
家出同然にして家を出ると、萩で儒学を教えていた遠縁の玉本文之進を頼り、農
作業の手伝いをしながら、その内弟子になったのです。家を守る、家を継ぐこと
が何よりも大切な時代ですから、「養子、養子」の時代です。玉木は松下村塾を開
いた有名な学者ですが、この人も養子です。やがて松下村塾を継ぐ吉田松蔭の叔
父であり、師匠でもあります。乃木の弟正誼は玉木の養子になりましたから、乃
木は長州では、玉本文之進、吉田松蔭に連なる由緒ある血筋だったと云えます。

乃木が陸軍に入ったのは明治四年ですが、二十二歳でいきなり陸軍少佐になっ
ています。乃木は戊辰戦争には形だけ参加したようなもので、明治維新の手柄な
しに抜擢されたので、「長州の御大山県有朋の引き立てだ」。これが定説になつて
いますが、実は後に第二代首相となる薩摩の黒田清隆の推薦だったのです。乃木
を可愛がっていた従兄の御堀耕助、この人は長州藩の参政、閣僚を務めた実力者
ですが、結核で療養中の御堀を乃木が訪ねた時、見舞いにきていたのが陸軍中将
の黒田でした。当時大將は西郷隆盛ただ一人、中將も黒田と山県の二人だけだ
から、陸軍切つての実力者です。間もなく三十歳の若さで病死する御堀から「こ
の青年を頼む」と乃木を託された黒田が、約束を守ったのです。黒田という人は
酒乱でいろいろ問題を起こした人ですが、函館五稜郭で降伏した榎本武揚の命を
救ったように、一度引き受けたことは命懸けで守る、信義に厚い人でした。

それにしても御堀はなぜ、同じ長州の山県に頼まなかったのでしょうか。御堀と山県は、維新後一緒にヨーロッパを視察した仲です。よっぽど仲が悪かったのか、それとも足輕の出でかつては極めて身分の低かった山県に、頭を下げるのが嫌だったのか。いずれにしろ長州の乃木が、薩摩の押しで陸軍に入ったことが、乃木の前半生に暗い影を落としたように思います。

乃木の夫人静子は、薩摩藩士の娘です。郷土意識の極めて強かった時代、しかも維新で手を結んだとはいえ、もともとは犬猿の仲だった薩摩から、乃木が妻を迎えた真意は何だったのでしょうか。乃木は明治十一年、連隊長としては最右翼の東京の歩兵第一連隊長になりましたが、放蕩無頼の生活はやみません。心配した乃木の母親寿子が、「嫁でも取れば」と相談した乃木の副官が薩摩出身で、知人の娘を紹介したのです。乃木が承知したのは、薩摩のあつれきに嫌気がさし、自分の結婚でお手本を見せてやる。そんな乃木らしい正義感があつたのかも知れませんが、寿子は厳格で昼から冷や酒を飲むほどの強い女性です。乃木の左目は失明同然で、寿子から蚊帳の釣り手で折檻されたためだと云われます。そんな寿子と静子の仲が円満にゆくわけもなく、静子は一時別居生活を送っています。

その頃の乃木の上官で、「観樹將軍」と云われた長州出身の三浦梧楼中將は、回顧録にこんなことを書いています。ある時薩摩の間で論争になり、「腕力でやれ」と怒鳴る者がいます。見ると乃木なので、「何だ帰薩、混血児を作りおつて」と言つてやつたと云うのです。帰薩とは聞き慣れない言葉ですが、薩摩人を女房にして薩摩に帰化したという意味で、混血児というのは、やがて日露戦争で戦死する長男勝典のことです。何ともひどい話ですが、乃木には薩摩対立の狭間で帰薩と呼ばれ続ける中途半端な孤立感。しかも家庭もうまくいっていません。酒でも飲まなければやりきれない、鬱屈とした気持ちがあつたのではないのでしょうか。

乃木が本来の長州閥に組み入れられるのは、明治七年に陸軍卿山県有朋の伝令使、今でいうと大臣秘書官になつてからです。山県が松下村塾で吉田松蔭の教えを受けたのはほんの短い期間でしたが、終生松蔭を尊敬し、松蔭のことを口にする時は常に「松蔭先生」と衿を正したそうです。足輕の出で、家柄も門閥もない山県にとつて、松蔭と松下村塾は精神的な支えであり、それに連なる乃木に目をかけたのもわかります。

乃木は明治八年の暮れ、小倉の第十四連隊長心得を命じられました。心得というのは、大佐か中佐の連隊長職に少佐の乃木を抜擢したからです。西国のあちこちで不平士族の不満が高まり、一触即発が心配されている時です。長州出身の参議前原一誠も政府内で意見が合わず、萩に帰つて不平士族の頭領に祭り上げられています。実は乃木の弟正誼は前原の参謀であり、玉木文之進も前原の支持者だったのです。山県がそれを承知で、長州と目と鼻の先の小倉の連隊長に乃木を起用したのは、なぜだったのでしょうか。乃木が裏切れば、それこそ連隊ごと

ごっそり前原則についてしまふ心配さえありました。勿論それだけ乃木を信頼していたのですが、同時に乃木に情報收拾させる、スパイをさせる狙いがあったのではないでしょうか。板挟みになった乃木は苦しんだことと思います。結局乃木は弟正誼の執拗な誘いを断つただけではなく、弟から得た情報を逐一、山県に詳細に報告しているのです。明治九年十月、熊本の新風連の乱、福岡県甘木市の秋月の乱に続いて、前原一誠が萩の乱を起こしました。正誼が戦死すると玉木は割腹自殺、前原も漁船で島根まで逃げたものの、捕まって首を斬られます。

乃木には長州の先輩である福原和勝大佐、この人は山県の右腕と云われ、西南戦争で戦死した人ですが、その福原との間に交わした往復書簡が残っています。その中で乃木は、「自分は弟に対して、骨肉の情まで断つて、己れを知る者のために報いようとしたのだ」と書いています。己れを知る者とは、自分を取り立ててくれた山県のことです。山県に報いた乃木にとって、弟と恩師の死は、いつまでも心のオリとなって残つたように思います。

明治の陸軍は、最初幕府にならつてフランス式を採用していましたが、普仏戦争でプロシヤ、つまりドイツがフランスに勝つてから、急速にドイツに傾き、ドイツに切り替えていきます。陸軍大学校の戦術教官にドイツからメツケル少佐を招いたのもそうですし、乃木のドイツ留学もその一環でした。乃木と一緒に留学した川上操六少将、この人はやがて参謀総長になったように、戦術、戦術の研究が目的でした。乃木は一年半の留学を終えると、「精神家乃木」という別人になつて帰国しますが、「名誉を重んじるドイツ軍人の根源は制服着用にある」として、「将校は家庭でも制服を着るべきだ」。こんな意見書を出しているところを見ると、教育制度の研究が目的だったのかも知れません。田中義一に「感ずるところあり」と云つたのは、ドイツ軍人に軍人のあるべき姿を見いだし、理想的武人像に向かつて努力することで、国家に尽くそうと思つたのではないのでしょうか。そのひたすら努力する姿が乃木崇拜者を生み、また時に窮屈なほど厳格だったため、乃木に対する反発も生まれたように思います。

乃木は將軍になつてから三度も休職になると云う、軍人としてはちよつと異常な経歴を持っています。その都度栃木県那須野の別邸に引きこもり、晴耕雨読の生活を送りました。稗飯を食べ、質素で時世に恬淡とした乃木のイメージは、この那須野から生まれています。といて「世捨て人」かと云うと、決してそうではありません。乃木の日記によると、上京した時は必ず山県有朋をはじめ陸軍の幹部を精力的に訪問しているのです。だからこそ、三度目の休職を除いては十か月足らずと、極めて短い期間で復職しているのでしょう。

乃木の最初の休職は明治二十五年、名古屋の旅団長時代です。上司の師団長としてやって来たのが、かつては後輩で階級も下だった桂太郎です。ウマが合わないというのはどうしようもないもので、秀才然とした桂が乃木には我慢出来な

ったのか、病気を理由に休職しています。桂は「軍服を着たいと持ち」とか、誰かれ構わずニコニコ、ポンと肩を叩くので「ニコポン宰相」とか云われた人ですが、濃尾大地震の決断を見ると、ただ調子がいいだけの男でなかったことが分かります。愛知、岐阜両県で倒壊家屋十四万戸、死者七千三百人。通信が途絶し、警察も消防も手の出しようがありません。当時も軍隊の出動は知事の要請がないと出来なかったのですが、一刻の遅れが被害を大きくすると思つた桂は、独断で師団の出動を命令したのです。工兵隊や衛生隊が医療や復旧に活躍し、師団の放出した食糧が市民を飢えから救いました。桂は独断出兵の責任を取りつて辞表を出しましたが、明治天皇は桂の機敏な処置を大変喜ばれ、却下されたのです。

乃木の二度目の休職は台湾総督時代です。台湾は日清戦争で日本の領土になりましたが、独立運動に、土匪と云つて武装ゲリラの反乱、軍人と役人の反目、悪徳業者の横行。フランスがほしがっているから「売ってしまえ」。こんな声が出たほど、行政能力のない乃木には手に余つたようです。乃木は親しい友人に、こんな手紙を書いていきます。「官吏が台湾に来るのは贅沢をしたいからで、一人も永住の心を持つていない者がいない。ほんの腰掛け同様だから、従つて親切の情を持たぬ。親切のない者が、どうして新領土の民心を収めることが出来よう」。確かにその通りなのですが、乃木の不幸は、旅順でもそうだったように、良きパートナーに恵まれないことでした。

後を引き継いだ児玉源太郎は、軍人総督でありながら、民生優先を打ち出し、民政長官に後藤新平を据えて存分に腕を揮わせました。後藤は関東大震災の時の東京市長で、首都復興の先頭に立つて軌道に乗せた人です。その後藤がまざるやつたのは、官吏千八百人の整理でした。これで役人の気持ちを引き締め、砂糖を台湾の代表産業に育て上げたのです。現地人にも仕事を与える授産対策を次々と打ち出し、日本の台湾統治の土台はこの児玉総督時代に固まったと云われます。それは児玉が後藤新平という有能な協力者を得たからであり、その後藤を唸らせ、心服させたのは、児玉の決断力であり、実行力でした。

児玉も長州の支藩、三万石の徳山藩出身です。五歳の時に父親が自殺、姉に迎えた婿養子も暗殺されるといふ、悲惨な少年時代を送っています。陸軍でも長州閥の恩恵を受けずに、軍曹という下士官からのスタートでした。児玉の決断力、実行力は、「頼るのは自分だけ」と云う、この少年時代の辛い体験がバネになったように思います。児玉は日露戦争で精根を使い果たしたかのように、戦争が終わつた翌年、三十九年七月に五十三歳の若さで亡くなりました。

乃木の三度目の休職は、四国善通寺に新設された第十一師団長の時です。大変厳格な師団長だったそうです。丸亀連隊の将校が夜な夜な遊び回っていると聞くと、善通寺連隊に夜間行軍をさせ、丸亀の兵舎を囲んで非常呼集のラッパを吹かせたと云うのです。午前二時、歓楽街で遊んでいた将校たちは、さぞバツの悪い

思いで兵營に駆け付けたことでしょう。兵隊のゲートルのボタンが外れているのを見付け、中隊長が「バラにひっかけて外れた」とかばうと、そのバラはどこにあるかと兵營中を探させます。結局は嘘を認めた中隊長に、始末書を書かせたと云うのですが、部下をかばった中隊長のとつさの機転も、嘘の嫌いな乃木には通用しません。

乃木の休職は、明治三十三年の北清事変の時の馬蹄銀事件が原因でした。北清事変と云うのは、旅順がロシア、山東半島の青島がドイツ、威海衛がイギリス、広州灣がフランスと、中国各地がまるで虫食い状態で侵略された時、義和団と云って、これに怒った中国民衆が攘夷運動を起こしたのです。列強諸国は北京の公使館が義和団に包囲されると、救援のため連合軍を編成、日本からは広島の第五師団が派遣されました。第十一師団からも一個大隊が参加しましたが、その際日本軍は三百万両、十万トという膨大な馬蹄の形をした銀塊を押収しました。ところがその一部を高級将校がポケットに入れてしまい、それを知っている兵隊たちが、分け前を要求して騒ぎ出したのです。乃木は大隊長を直接調べて免官処分にし、上司の連隊長を休職、自分も病気を理由に休職を願い出ました。この事件はやがて政治問題になり、憲兵隊が第五師団長の官舎などを家宅搜索しましたが、関係者のほとんどが長州です。何しろ「長州の陸軍」と云われた時代ですから、刑事責任を問われた者は一人もなく、第五師団では連隊長ら二人が停職になっただけでした。乃木としては極めて鮮やかな出処進退だったので、第十一師団では、「不名誉な免官処分は自分の所だけだ、片手落ちだ」と、乃木を恨む気分が強かったと云います。

旅順を戦った第三軍は、東京の第一師団、金沢の第九師団、そしてこの第十一師団です。乃木が初代師団長を務めた子飼いの師団ですから、普通なら「乃木の為なら」という気持ちがあつて当然なのですが、そうではありませんでした。機密日露戦史は、第十一師団の大隊長・志紀守治少佐のこんな話を伝えています。「軍司令官が死を決しているとの話が伝わったが、ご随意にとばかり聞き流しただけだ。二人の子息が戦死した話も、今日では第一線の士気を鼓舞したように伝えられているが、全く嘘で、当然くらいに考えていた」と云うのです。「乃木將軍は無能ではない」と弁護した今村大將は、「軍司令官の能力評価には統率力が欠かれない」と言っています。しかし、第三軍の前線を視察した田中重少佐も「軍司令官の威信、地に墮ちたり」と児玉に報告していますし、旅順がなかなか落ちず犠牲が重なるうちに前線の空気も荒んでいったようです。

乃木という人は、写真を見ても実に温和な、いい顔をしています。善通寺の人たちは、馬で出勤の途中、子供たちがお辞儀をすると、ニコニコ笑って手をあげる光景を見えています。ところが家庭では仏頂面なのです。俗に云う内面が悪いのでしょうか、「軍人の家庭は」という意識も強かったようです。勝典、保典の二人

の子供は、軍人にする積もりで一切が軍隊教育でした。座る時は膝を崩すな、本を読む姿勢から箸の上げ下ろしまで、ことごとく乃木が指図したと云います。二人の子供を庭に立たせて、突然カラのピストルを撃つて肝試しをする。学校から帰ってくると、「学校と家との距離は」と尋ね、答えられないと「すぐ測ってこい」と命じる。厳しさを通り越して、何か病的な感じさえします。

善通寺の金倉寺というお寺に、「乃木將軍妻返しの松」と云う石碑があるのだそうです。師団長の乃木は単身赴任で、このお寺の一室を借りていたのですが、ある時静子夫人が東京から訪ねてきました。ところが乃木は「夫の許しもなしに、なぜ来た」と、頑として会おうとしません。静子は「手紙に書けない家庭内のこともある」と、泣く泣く宿屋に帰ったと云います。長男の勝典は陸軍士官学校に入ったものの、弟の保典と違って性格も大人しく、余り軍人には向いていなかったようです。休日に帰宅したまま士官学校に戻らなかった事件があり、静子は退学させて別の道を選ばせたらどうかと、相談に乃木を訪ねてきたのです。翌日住職と副官の取り成しでやつと会うことが出来ましたが、乃木は極めて冷淡だったと云います。乃木が有名になってから、「乃木の公私の別の厳しさ」を伝える話として、この石碑が建てられたのだそうですが、乃木に軍隊生活はあっても、家庭生活はなかったようです。

日露戦争が始まると、勝典は第一師団の少尉として一足早く戦地に向かいました。出征前夜、静子夫人は一家団欒の夕食を用意して、乃木に「今晚だけは笑顔を見せて下さい」と頼んだと云います。ところが乃木は「笑っちゃいかん。しつかりしろ」と夫人を叱り付け、しかもつ面のままニコリともせず酒を飲んだと云うのです。勝典は金州郊外の南山で戦死しましたが、旅順に向かう途中で知った乃木は、「三典の棺が揃うまで」、つまり勝典、保典に、希典が戦死するまで「葬式は出すな」と、静子夫人に手紙を書いています。乃木の覚悟を示した美談として伝えられましたが、夫人は部屋に閉じこもったまま、狂おしいほどに泣き続けたと云います。次男の保典は周りが心配して、旅団長副官という比較的安全な後方勤務につけたのですが、不運にも二〇三高地の麓で伝令に行く途中、流れ弾に当たって戦死しました。夫人は戦後の生活を「涙の出るほど物寂しい境遇でした」と話していますが、二児を失った母親としては当然過ぎる心情でした。

悲しみを一切表に出さなかった乃木は、どうだったのでしょうか。シカゴ・ニュースの記者として第三軍に従軍したスタンレー・ウォシユバンという人が、「乃木大将と日本人」という本を書いています。その中に外国人記者の目で、鋭く乃木の姿をとらえた場面が幾つかあります。それは奉天の戦いも終わり、日露両軍が対峙を続けている三十八年六月のことです。夕暮れ時になると毎日、司令部の民家の屋根の上に上げたアーム・チェアに、乃木の姿が見られたと云うのです。遠く興安嶺に沈む夕日を見ながら、静かに椅子をゆらす乃木。ウォシユバンは「い

かに機嫌よく陽気に見えても、乃木大将はあわれ断腸の人であった」と書いています。はらわたを断つ、断腸の思いの断腸です。沈む夕日に乃木は、勝典、保典の面影を重ねていたのではないのでしょうか。乃木は勝典が戦死した南山で「山川草木転た荒涼 十里風なまぐさし新戦場」の有名な漢詩を残しています。乃木にとつて、山も川も草も木も、天地すべて悲しみの色に見えたことでしょうか。二〇三高地で詠んだ「爾靈山」の漢詩も、爾の靈とは保典のことであり、保典の眠る山に万感の思いを寄せたのではないのでしょうか。

旅順陥落で司令部幕僚たちが祝杯をあげている時、いつの間にか乃木の姿が見えません。副官が乃木のテントへ行ってみると、乃木は薄暗いランプの前に両手で額をおおい、頬には涙が見えたと云います。大勢の部下を死なせて、恐らくはこれが乃木の正直な気持ちだったのでしょう。ウオシユバンは、ステツセルから贈られた白馬に跨がった乃木の写真を東京の駐在員に送り、静子夫人に届けてくれと頼みました。しばらく見入っていた夫人は、はらはらと涙を流してこう云ったそうです。「戦争になつてから主人と会うのは、これが初めてです。主人が出發の別れに、戦争が首尾よく終わるまでは、自分のことは死んだものと思え。その時までには便りをするな、自分も便りはしない。自分は、生命も時間も考えも、全て陛下と国家に捧げているのだから、少しの私情も入ってはならないと申しましたが、その通りでした」と。

家庭の安らぎをひたすら拒み続けてきた軍人乃木が、人前で夫人に対して初めて情愛の念を見せた場面があります。それは沿道が万歳の歓呼と日の丸の旗で埋まった乃木凱旋の日でした。乃木は出迎えた静子夫人の手を握ると、「只今帰りました」と、しばらくその手を放さなかったと云います。二児を失った悲しみを分かち合えるのは、夫婦だけという気持ちだったのでしょうか。夫人の姉のお孫さんが書いたものによると、その夜の乃木は珍しく乱れています。陸軍大臣の寺内正毅も駆け付けて凱旋の祝宴が開かれたのですが、宴半ばで二階の勝典、保典の勉強部屋に上がった乃木は、大の字に寝つ転がると、鴨居に架けてあった二人の写真をじつと見ていたそうです。突然「酒だ、酒だ」と叫び出したので、親戚の子供が持つていくと、「お前も外戚だ」。つまり夫人の血縁なのです。「ここにいる者はみんな外戚だ。ダメだ」と怒鳴り、最後は狂ったように、「寺内を殴つてこい」と繰り返したそうです。二人の子供を失い、人間剥出しの乃木の悲しみが、そのまま伝わってくるような話です。乃木は遺書に「伯爵家を断絶する」と書いていますが、人一倍「血の流れ」を大切にしたい乃木にとって、やはり二児を失ったことが、殉死の大きな引き金になったように思います。

乃木の殉死はまた、明治天皇に愛され、信任されたことに始まります。十五歳で即位された明治天皇の侍従を基本的に武士で固めたのは、西郷隆盛の意向だったと云われます。明治天皇は孝明天皇のたった一人の男の子であり、しかも病弱

でした。とにかく丈夫に育つて貰わないと、明治維新そのものが吹き飛んでしまふ心配がありました。侍従に起用されたのは、維新の風運をくぐりぬけてきた硬骨漢ばかりです。勝海舟の使者として西郷隆盛に会い、江戸城無血開城の道を開いた山岡鉄舟は無刀流の剣の達人でした。西南戦争で西郷と共に死ぬ村田新八、佐賀の乱で処刑される島義勇。彼らは若き天皇に遠慮会釈なく接し、馬術や武芸の相手をして、時には酒を酌み交わしながら、天皇を骨太に教育しました。公家と女官に囲まれて育つた天皇には、全てが新鮮であり、中でも西郷に対する信任と敬愛の念は絶大だったそうです。

昭和天皇が日米開戦の御前会議で読み上げられた、明治天皇の有名な御製があります。「よもの海みなはらからと思ふ世に　なと浪風の立ちさはくらん」。この歌は明治天皇が日露開戦に当たって詠まれたと云うのが定説になっていますが、実は「西南戦争の時の作だ」という説があるのだそうです。そう云われてみると、「みなはらから」には、「兄弟」と同時に「同じ国民」という意味がありますから、ロシア相手の戦争よりは、西郷と結びつけた方が自然な感じもします。しかも日露戦争の歌だとすれば、これから戦争を始めるというのに、最高指導者の歌としてはちよつと他人事みたいな、外から眺めた第三者的な感じがします。ところがこれが天皇の意志とは関わりなく、西郷蜂起の形で始まった西南戦争なら、「西郷がどうして、なぜ」といった天皇の戸惑いが、そのまま伝わってきます。同時に西郷に対する天皇の思い入れも、わかるような気がします。上野公園の兵児帯姿の西郷さんの銅像は、彫刻家高村光運の手で明治三十一年に完成しましたが、天皇は建設費用にと五百円のご下賜金を出されているのです。

明治天皇の周りには、伊藤博文、山県有朋など、政治、外交、軍事に有能な人材は揃っていました。しかし天皇は、愚直なばかりに誠実で真面目な乃木に、西郷や山岡鉄舟に通ずる、親しみを感じたのではないでしょうか。乃木は三度の休職中でも、天皇が統率する年に一度の陸軍大演習には必ず出かけています。休職中の軍人は出てもする事がないので、大抵は欠席します。天皇に従って野山を駆け回る乃木に、天皇は「乃木は感心である」と云われたそうです。三十五年の九州大演習で、天皇のお召し列車が田原坂の近くを通った時です。「乃木に与えよ」といつて詠まれた歌が、「武士のせめ戦ひし田原坂　松も老木になりけるかな」。天皇にとっては、田原坂で戦った西郷も乃木も、まさに武士そのものだったので。乃木は天皇の信任を肌で感じたでしょう。そして同時に、ここで軍旗を失ったことに、改めて自責の念を強くしたのだと思います。

明治天皇には十五人のお子さんが生まれましたが、成人したのは五人だけ。天皇の位を継ぐ男子は、後の大正天皇ただ一人です。しかも養育を公家と女官任せにした大正天皇は、誕生直後に脳膜炎を患い、類をみないほど多病であり、飽きっぽかったと云います。ですから明治三十四年に昭和天皇が生まれた時、明治天

皇はこのお孫さんに大きな期待をかけられたようです。学習院長に乃木を任命して、「華族教育の事、すべて任す」と云われた背景には、自分がかつて山岡鉄舟たちに鍛えられたように、剛直な乃木に天皇の孫を託したいという思いが強かったのではないでしょうか。天皇は「いさがある人を教への親として おほし立てなん 大和撫子」の歌を贈られています、乃木に対する天皇の信任のほどがよくわかります。

学習院での乃木は好々爺そのものだったそうです。勤勉、努力、忍耐、質素、そして真摯。乃木が教えたかったことはいっぱいあったでしょうが、乃木はわが子の時と違って、言葉では指図せず自らやって見せたのです。それもニコニコしながら。生徒と旅行に出掛けると、どんな時でも夜中に生徒の寢室を回って、風邪を引かないかとか、衛生に気を使つたと云います。学習院が四谷から目白の新校舎に移ると、生徒と一緒に寄宿舎生活をしましたが、その日から好きだった酒も煙草もやめています。もちろん軍人院長に対する反発はありましたが、「おじいさん」と呼んで敬愛した生徒が多かったそうです。これが乃木の本当の姿だったとしたなら、なぜ家庭でもそれを素直に表わさなかったのか。私はやはり、乃木の大きな性格的な欠陥だったように思います。

乃木は日露戦争の凱旋報告を終えて天皇の御前を下がる時、「ひとえに自分の罪であり、願わくば死を賜え。割腹してお詫びしたい」と言つたといわれます。しばらく言葉もなかつた明治天皇は、下がろうとする乃木を呼び止め、「今は死ぬべき時ではない。もし死を願うなら、自分が世を去つてからにせよ」と声をかけられました。天皇は乃木より三歳年下であり、健康そのもののように見えましたが、ご自分でもそう思われていたのでしょうか。実はこの時すでに糖尿病にかかつており、ごく一部の者を除いて嚴重に隠されていたので、天皇ご自身もご存じなかつたのです。乃木をいたわる積もりで、こう言葉をかけられたのですが、自分の方が後だと思つていた死の順番は、逆になりました。

明治四十五年は、異常に熱い夏だったそうです。そして天皇の異常が傍目にもはつきりしたのは七月十五日、一時間たらずの枢密院会議で再三眠り込む姿が見られてからです。宮内省は二十日、「恍惚の状態にて」と、初めて天皇が危篤であることを発表しました。「恍惚」という言葉は、有吉佐和子さんの小説「恍惚の人」で有名になりましたが、実は明治天皇の病状で使われた言葉なのです。天皇は三十日午前零時過ぎ亡くなりました。半世紀に近い明治の終わりが、人々にとつてどれほど衝撃だったか。どの新聞も全紙黒枠で囲んだ紙面が、それを物語っています。乃木の覚悟はすぐ決まつたようです。後の昭和天皇、十一歳の裕仁親王は、明治天皇のご指示で乃木のことを「院長閣下」と呼んでいましたが、乃木は別れの挨拶に伺っています。子供心に何か異常なものを感じたのでしょうか。「院長閣下、あなたはどこかへ行ってしまうのか」。あの甲高い声で乃木に尋ねられ

たのを、女官たちが耳にしています。

ご大葬まで四十日余りありました。書類など身辺を整理する乃木に、静子夫人はいつ、乃木の決意を感じとつたのでしょうか。夫人は乃木に、乃木家の跡目をどうするかと聞いています。乃木が「心配だったら、自分と一緒に死んだらよからう」と冗談めかして云うと、夫人は「いやですよ。せいぜい長生きしてお芝居を見、美味しいものをどっさり食べたいと、考えているのですから」と答えたそうです。夫人は若い頃から芝居好きで、戦後は着物道楽に凝っていました。夫人の悲しみを知っている乃木は、黙って許していたと云います。乃木の遺書には、夫人宛てのものもありました。乃木は一人で行く積もりだったのか、それとも冗談めかした言葉に、それとなく自分の決意を伝えた積もりだったのか。

九月十三日午後八時、天皇の棺が二重橋を出て青山斎場に向かい、一斉に号砲が鳴つたのを合図に、乃木夫妻は自刃しました。その十五分前に、夫人は葡萄酒を持って二階に上がっています。恩賜の葡萄酒でした。夫人宛ての遺書がそのまま残されているところを見ると、この別れの杯を交わした時に、夫人が「自分も一緒に」と、決意を伝えたのかも知れません。夫人は短刀で三度胸を刺し、最後は乃木が力を貸しています。乃木はもちろん軍服姿でした。作法に則つて軍刀で十文字腹に切り、ボタンをかけて服装を整えた後、刃を両手で持つて頸動脈を切断しています。乃木六十三歳、静子夫人五十三歳でした。

乃木の遺書を号外で特報したのは国民新聞です。赤坂警察署長から聞き出した遺書は十か条から成り、第一条は「自分このたびお跡を追い奉り自殺候段…」と始まっています。確かに「明治十年の役、西南戦争で軍旗を失い、その後死処を得たいと心がけたが、その機会を得ず」と書いています。だがポイントはその次「追い追い老衰、もはやお役に立ち候時も余日なく」、ここにあるのだと思います。明治天皇は乃木にとつて己れを知る者、乃木を引き立ててくれた人です。己れを知る者に報いるため、お役に立つと全力を尽くしてきたが、天皇の崩御でお役に立つことが出来ない。かつて乃木は、己れを知る者山県に、弟との骨肉の情を断つて報い、いま己れを知る者明治天皇に死を以て報いる。理由としては、明治天皇から親しく授けられた軍旗が、軍人として一番ふさわしいと思つたのではないのでしょうか。辞世の歌は「うつし世を神さりましたし大君のみあとしたひて我はゆくなり」でした。

古い風習であつた殉死は、徳川の時代になつてもなお道徳視する風潮が残り、十代將軍家治の天明二年、一七八二年ですが、武家諸法度に加えて禁止しました。それだけに乃木夫妻の殉死は改めて社会を驚かせましたが、反響も様々でした。ドイツ留学時代に乃木と知り合い、親しく乃木邸に出入りしていた文豪の森鷗外は、「半信半疑」と日記に書いています。「息をのんで、眼を数行の記事に走らした。『尤もだ、無理はない、尤もだ』。かく眩きつつ、余は新聞を顔に打ちお

おふた」。こう書いたのは、作家の徳富蘆花です。志賀直哉は「馬鹿な奴だ」という気が、ちようど下女か何かが無考えに何かした時に感ずる心持ちと同じような感じ方」と書き、その日記には歌人の吉井勇が「近ごろ不愉快なことでした」と云ったことが書いてあります。

乃木夫妻の殉死は、「明治という時代の終わり」を最も象徴的に示した事件でした。新聞論調は「崇高なる人格」と賛美するもの、「古き時代の遺物」と否定するもの、ほぼ一か月にわたって海外の反響も交えて論争が展開されましたが、それは大正デモクラシーの夜明けを告げるものでもありませんでした。時事新報は「乃木を忠臣だといって、死を称賛する者がいれば大きな心得違いだし、忠義論から云っても、新しい天皇に尽くすべきだ」と書きました。「わざとらしい」と乃木批判の評論を東京日日に寄せたのは、京都大学教授の谷本富です。「その古武士的質素純直の性格はいかにも立派なるに拘らず、何となくわざと飾れるように思われ、心ひそかにこれを快しとせず」と云うのです。しかし、乃木批判を出した新聞に読者の抗議が相次ぎ、万朝報が「今日まではすぐれし人と思ひしに、人と生まれし神にぞありける」と書くに至って、乃木は批判を許さない、大きな存在になっていったのです。

乃木の一生は常に耐え、耐えることによって、自分の美意識を貫いた感じがします。乃木をどう見るかは、戦前の忠君愛国の時代と今では価値観が大きく違います。また年代、乃木と同じ六十代の人と若い人でも違うでしょう。ただ乃木の美談が、いつの間にか都合のいい部分だけが強調されていったのは残念なことでした。陸軍で云えば、旅順の多大な犠牲をよそに、「陸戦の最後を決めるのは銃剣突撃だ」と、相変わらず銃剣を振りかざしての突撃、精神主義が幅をきかすようになりました。

乃木がステツセルに見せた武士道の奥床しさは、残念ながら歌に残ったただけで日本陸軍には忘れられました。乃木は旅順で、総攻撃のたびに必ず各部隊に憲兵を用意させ、占領後の治安維持、ことに婦女子や非戦闘員の保護に心を配りました。前線では「また乃木式が始まった。これから戦おうというのに、戦った後のことを心配している」と、評判が悪かったそうです。しかし乃木のこうした心配りこそ、本当は大切だったのではないのでしょうか。日露戦争までの日本は、外交にしろ軍事にしろ、日本の弱さを十分に承知して、それを補うために努力し、外国にもいろいろと気を遣う国でした。国際法を守るといふ点では、優等生の国でした。ところが戦いに勝って「一等国になった」と、いつの間にかふんぞり返る国になってしまいました。そして昭和に入ってから、平気で国際法を破る国になったのは、大変残念なことでした。